アリーナの奇襲に驚愕する闘技場（コロシアム）！
しかし、その奇襲すら、わざと急所を外すように放たれていた！
「あの＜蟹（クラッベ）＞、姫様は本気で撃ってはおりませぬ」

ハンの反撃、続けざまに襲い来る連続技（コンビネーション）をかわし切り、全く同じ技を、しかも更なる高速で使ってみせるアリーナ。しかも、最後の一撃を手加減して‥‥。
アリーナには、５年前、今の＜拳聖＞となる前の‥‥人を殺してしまう前の、荒ぶる格闘家であった頃のハンと戦いたい、という夢があったのである。
「もう、貴方にも分かってるはずよ。＜拳聖＞のままでは私に勝てないって」

しかし‥‥
「まだ、＜拳聖＞は‥‥私の５年間は、負けてはいない‥‥」
ハンは、彼の、いや＜拳聖＞最大の技を、ついに出したのである！

「『拳聖無限拳』‥‥行くぞぉッ！」

＊

この物語は、後に「不屈の王女殿下（ハイネス）」と呼ばれる、サントハイム聖王国第一王女、アリーナ・フォン・サントハイム殿下の、熱く激しい闘いの記録である！

熱血格闘系・ドラクエ４二次創作小説

「不屈の王女殿下（ハイネス）」

～エニックス「ドラゴンクエスト４・導かれし者たち」第２章より～

第８話　「開かれし神の掌（てのひら）」

あさづけ兄貴

「行くぞぉッ！」

鋭いかけ声と共に、ハンが前に出た！
アリーナの鳩尾（みぞおち）めがけ、左の胴撃（ボディブロー）ち！

「！」
ギリギリで体をひねってかわしたアリーナの顔面を、今度は右の正拳が襲う！
（速い‥‥かわせない！）

アリーナは、かわすのではなく、左手で拳を払いのけた！
その瞬間に、アリーナの右こめかみめがけ、フック！
（くっ！）
これはスウェーでかわす！
しかし、今度は右の拳が‥‥

「アリーナ姫が‥‥押されている！」
上ずった声で、エンドール王が叫んだ。

確かに、その通りであった。
ハンの息もつかせぬ連打に、アリーナは防戦一方である。

「技は何の変哲もないただの連撃‥‥ただ、彼奴の拳のスピードが、さっきより増しております。しかも、あのように、雨あられのごとき連打‥‥」
ブライもさすがに、先ほどのような自信満々の口調ではない。
「姫様‥‥しのいで下され‥‥」

＊

ハンの連打が始まってから、１分。

小刻みに、顔面と胴を狙い分け、正拳とフック、アッパーを打ち分ける。
これだけの長時間、拳を撃ち続けているにもかかわらず、スピードが、全く衰えない。

１分というと、短い時間に思えるが、その間、１秒間に何発も、全力で突きを繰り出しているのだ。常人であれば、著しく体力を消耗し、突きを撃てなくなるはずである。

それが、ハンの場合、そうではないのだ。

アリーナも、ある時はかわし、ある時は手で払い、ある時はガード‥‥と、必死に防御している。
パシッ！ パシパシッ！
右の正拳を上に流し、左、また右と続けざまに襲い来る胴打ち（ボディブロー）を、左右に払う。
しかし‥‥
（きりがない‥‥このままじゃ‥‥！）

ザッ！
じれたアリーナが、右足を思い切り斜め前に踏み出す！
ハンの横に強引に回り込み、突破口を開こうというのだ！

しかし、ハンはそれを許さなかった！
ビュオン！
上段突きが、ゆるい軌道を描き、外側から食い込むように、アリーナの右頬を襲う！
「くっ！」
ガシッ！
前腕でブロックしたものの、アリーナはまた、ハンの正面に押し戻されてしまった‥‥。

「まずいのう」
ブライが、ぼそっと言葉を発した。
「？」
クリフトが、思わずブライの顔を覗き込んだ。
「姫様が‥‥あの姫様が、まるで反撃できておらん」
「ええ‥‥確かに」
クリフトのいらえを聞き、わずかに間をおいて、ブライは続けた。
「こういう局面では、好き勝手にできる攻撃側に比べて、相手に対応せねばならぬ防御側の方が圧倒的に不利じゃ。姫様は、その不利な側に居続けることを強いられておる」
得意の苦虫顔で、ブライの説明は続く。
「長い時間、反撃すらできず、ひたすら防御せねばならぬのは、つらいものじゃ。少しでも集中力が切れれば、食らう。一発食らえば、倒れるまで食らい続ける‥‥それこそ無限にな。『無限拳』とは良う言うたもんじゃ」

「ブライ様‥‥まさか、アリーナ姫様は、このまま‥‥」
「確かに、まずい‥‥」
泣きそうな声のモニカ姫に、ブライは変わらぬ口調で言った。
「彼奴に小さな隙でもあれば、反撃のチャンスもありますじゃろう。それをものに
　出来るのが、姫様です。しかし、今の彼奴には、それすらない」
「では、やっぱり‥‥」
「ですが、それでもなお、姫様がこのまま終わるとは、儂にはどうしても思えませぬ」

＊

戦闘台（リング）上では、常識を遥かに超えたハンの猛攻が続いている。
「無限拳」初弾より、時間にして２分半。
人間離れしたスタミナである、としか言いようがない。

「なんてヤツだ‥‥化物（モンスター）顔負けだな」
観客席のサイモンが、ひとり呟く。

パシッ！
（ぐっ‥‥！）
突きを払う手にも、痛みが走る。

ガードを続ける両腕・両手の痛みと、精神的な消耗。
　最小限の動きで防御していたアリーナであるが、「無限拳」の圧倒的な攻撃力の前に、さすがに、その防御にほころびが見え始めていた。

左正拳をかわし、右フックを叩き落とす。
手の痛みに、歯を食いしばり、耐える。
（やばいな‥‥こっちが参っちゃうのが先か‥‥）

「おああっ！」
叫びながら、両拳を突き続けるハン。
（私の５年間は負けぬ！ 私の５年間は決して誤ってはおらぬ！ なればこそ、私はこの
　「無限拳」で勝つ！）

（どうやって、ここからひっくり返す？）
　アリーナが自問する。
（まったく隙が無いのに‥‥）

「今言うたように、今のところ、あれだけの長時間にわたって攻め続けているにも
　かかわらず、彼奴には全く隙がありませぬ」
　奇しくもアリーナの考えと全く同じブライの言葉に、不安げな顔になるエンドール王とモニカ。
「しかし、彼奴も人の子、必ずいつか隙が出来るはず‥‥特に、勝利を確信した時には、
　な。そして‥‥」

（確かに隙は無い‥‥だけど、隙が無いなら‥‥）
　アリーナの瞳に、一瞬、光が宿る！

　そして、その直後‥‥
　力尽きたかのように、アリーナの膝が、がくんと落ちた！

「！」
　驚きに、思わず口に手を当てるモニカ！
「姫様！」
　クリフトも叫ぶ！

（やった‥‥！）
　ハンは、心の中で叫んだ。
　この５年間で得たものの全てを否定し、昔に戻れと言う‥‥＜拳聖＞である今の己にとって、もっとも恐るべき敵。
　その強大な挑戦者（チャレンジャー）が、己の全てを賭けた「無限拳」の圧倒的な力の前に、今、沈もうとしている‥‥。
　そう、思った。

「終わりだ！」

短い叫びの後、ハンは、必殺の左拳を、崩れ落ちたアリーナの頭部めがけ、撃ち下ろした。
そして、見た。
彼女の鋭い眼光を。

（隙が無いなら‥‥作ればいいっ！）

刹那、アリーナの体が、バネのように、右上に伸び上がった！

ギュンッ！
拳をわずかな見切りでかわし、くるっと回りながら、一瞬でハンの右側に回り込む！
力尽きた者のそれではあり得ない、雷光のごときその動き！
「何だとっ!?」

（出来たわ、隙が！）

180 度向きを変え、ハンと同じ方向を向いて、左横に並ぶ形になったアリーナ。
拳打の後で伸び切った、隙だらけのハンの左腕。
その前腕を右手でつかむ！
右腕を思い切り引きながら、ハンの左肘に、自分の右肘をぶつけた！

ビシッ！
外側に引かれ、過伸展されたハンの肘関節に、アリーナの肘が食い込む！
「ぐうっ!?」
想像もしない衝撃に、ハンがくぐもった声をあげた！

右手を離し、アリーナが攻める！
ハンの左横から、脇腹に左の中段蹴り（ミドルキック）、頬に右の正拳！
「ごふっ！」

ハンは、なぜか、左腕を動かそうとしない。
左からの攻撃が防御できず、結果、アリーナの攻撃が面白いように決まる！

「ヤアッ！」

とどめに、顔面に、左の‥‥今度は手加減無しの、上段回し蹴り！

ドォッ！
ものすごい音を立て、アリーナの左足がハンの顎を捉える！

ハンの体が後方に吹き飛び、倒れた！

「ああっ‥‥！」
「おお！」
モニカの、そしてエンドール王の喜びの声が上がる。

「やった！」
「そう、隙が無いならば、自分で作ればよい。姫様にはそれができる‥‥見事ですぞ
姫様」

そう。あの一瞬、アリーナが力尽きたかと思われた一瞬‥‥
アリーナは、わざと自分の体勢を崩し、ハンの攻撃、そしてその後の隙を誘発したのである。

人間は、勝利を確信した時に隙が生まれる。
ハンほどの格闘家でも、この心理的陥穽から逃れることは出来なかったのだ。

＊

「ふふ‥‥まさに、恐るべし‥‥ですね」
冷や汗を流しながら、笑うラゴス。
「力尽きかけたあの状況からひっくり返すとは‥‥いや、力尽きたかのように見えた
のも、相手に隙を作らせるための演技、なんてことは‥‥」
一瞬、言いよどむ。
「あるかもしれないな」
まさに、ラゴスの思った通りであった。

「何をやったの、今‥‥？」
例によって、ビビアンの表情はフードに隠れている。

「ハンの左腕が、上がらなくなったように見えたけれど‥‥」

「しかし、あそこから＜楔(カイル)＞とはのう」

「えっ？」
ブライの呟きに、モニカが聞き返す。
「いえ、あの技ですじゃ。姫様が、彼奴の拳をかわした後、腕をつかんで、その肘に、
ご自分の肘をぶつけられたでしょう」
「ええ。そう見えました」
「あれが＜楔(カイル)＞。短時間、相手の腕を使えなくする技ですじゃ。どういう原理かと
いうと‥‥クリフト、説明して差し上げい」
「あ、はい」

突然の指名に、やや慌てながら、クリフトが説明を始めた。

「えーと‥‥あの技ですが、姫様が狙ったのは、ここ。肘頭のほんの少し上です」
自分の肘のあたりを触りながら、ゆっくりと、柔らかな口調で話すクリフト。
モニカも、エンドール王も、説明に聞き入っている。

神官は、ある意味「人を癒す」職業である。そして、そのため、それに必要な人体に関する知識を、クリフトはじめ、神官はすべからく、神官学校で学んでいるのだ。
ブライがクリフトに説明を任せたのも、その知識を当てにしたからであった。

「ここには『尺骨神経(エルボーゲンネルフ)』と呼ばれる神経が通っています。この神経は、肘を通る他の
神経と違って、皮膚の直下の非常に浅いところを通っていて、衝撃に弱いのです。
ここに直接衝撃が加われば、短い時間ですが、腕が痺れ、動かせなくなるのですが
‥‥そう、例えばですね」

一瞬腕組みをして、考え込む様子を見せるが‥‥すぐに実例を思い付いたらしい。

「例えば‥‥肘を机の角にぶつけて、腕が痺れてしまった事はありませんか？」
「いえ、私(わたくし)は‥‥」
「これクリフト、一国の王女様を、お主と一緒にするでない」
得意の苦虫顔で、ブライがちゃちゃを入れる。
「余は経験があるぞ。確かに痛くてたまらぬ。そして腕がしばし動かなくなる」

　エンドール王の助け船。
「そう、ちょうどそれと同じことが、あのハンに起こったわけです」

「それでは、アリーナ姫様は‥‥」
「そう、相手の肘を伸ばして、この尺骨神経(エルボーゲンネルフ)を、自分の肘で打ったわけですね。
　ハンの左腕は、わずかな時間ですが、動かなくなったはずです」
「それで、アリーナ姫様の攻撃を防ぐ事ができなかったのですね‥‥」
「左様」
ブライがうなずく。
「それが＜楔(カイル)＞。文字通り、鉄壁の相手に打ち込み、崩すための楔(くさび)ですじゃ」

＊

ハンの意識は、夢と現(うつつ)の間をさまよっていた。

何も見えぬ、一切の暗闇の中。
遥か遠くに、観客の声援が聞こえるような気がする。

左腕の痺れは、消えている。
だが、体が動かない。
蹴りを受けた顔面が、燃えるように熱い。

（私は‥‥）
混濁する意識の中、己に問いかける。
（私は‥‥負けたのか‥‥）

返事は、無い。

（体が‥‥動かぬ‥‥）

＊

ゆっくりと、蹴り脚を下ろすアリーナ。

刺すような眼光が、消える。
我に返った、１７歳の少女の顔。

「！」
その顔が、一瞬、驚きに満たされる。
「やばっ！　やっちゃった！」

＊

（こんな事は‥‥あの時以来だ‥‥）
フラッシュバックする、ハンの古（いにしえ）の記憶。
（思い出す‥‥あの時を‥‥）

かつてのハンは、今のような、人を殺さぬ拳を振るう、「聖なる」格闘家では無かった。
その力と技で、あらゆる相手を正面からねじ伏せ、勝利する。
荒ぶる戦いの化身であったのだ。

そんな彼を変えた、ある戦いがあった。

５年前。
ある武術大会で、防衛王者ハンの前に立ちふさがった若き挑戦者。

彼は、強かった。
パワー、スピード、技の切れ。どれをとっても一級品。
そしてそれらが、高次元で見事に調和していた。

野獣のように獰猛に、猛禽のように鋭く。
挑戦者の猛攻に、さしものハンも、ダウンを余儀なくされたのだった。

だが、ハンは再び立ち上がる！
再びの激しい攻撃に、耐えに耐え、ついに放った一撃！
相手の強さに全身全霊で応えた、渾身の技！
それは、それまでの彼の格闘家人生の中で、最も切れ味鋭い、まさに最高の技であった。

その直撃を受けた挑戦者が、宙空高く舞い上がる！
勝利を確信するハン！

だが、奇跡の逆転勝利のその直後、悲劇は起こる。

そのまま再び地上に落下した挑戦者は‥‥
二度と、目覚めることはなかったのである。

強い衝撃による頚椎（けいつい）の骨折。
これが、挑戦者の死因である。

挑戦者の葬儀に参列したハンは、その母親が涙を流しながら睨む中、彼の霊前にこう誓ったという。

「君は強かった。それ故に、その強さに追い詰められた故に、私は君を殺してしまった‥‥もう二度と人は殺さぬ。殺さぬために‥‥私は強くなる」

（そうだ‥‥あれから５年、私は一から修行し直した‥‥二度と人を殺さぬために。
強くなるために）

彼の意識は今だ、闇の中である。

＊

「‥‥姫様の願いは、かなわなかったようじゃな」
「ですね」

「えっ？」
ブライとクリフトの会話の意味が分かりかねたのか、疑問の声をあげたモニカに、ブライが答える。
「恐らく、彼奴は立てますまい。姫様の本気の蹴りを、顎にもろに食ろうておる」
「多分、このまま、姫様の勝ちが決まると思います。姫様は手加減せずに戦ってしまいましたから」
「クリフトの言う通り。まあ、それだけあのハンが強かった、ということですな」
「？」
まだ、モニカには、ふたりの会話がピンとこない。

「姫様は、相手が強いが故に、思わず本気を出してしもうた」
「余裕がなかったんですよ、姫様は。手加減すれば負ける‥‥それほど、ハンは
　強かったのです」

　そう。殺されこそしなかったものの、ハンが今倒れているその理由こそは、彼自身がかつて人を殺した時と同じ、相手の強さ故、追い詰められた故の力だったのだ。

無論、倒れているハンがこのことを知る術は、無かった。

＊

（だが‥‥）
ハンの漂う暗闇に、ひとりの少女の顔が浮かぶ。
栗色の髪の、恐るべき天才少女。
（アリーナ・フォン・サントハイム‥‥）

脳裏に、彼女の言葉が響く。

『弱くなった貴方に、思い入れはないわ』
『私に言わせれば、ただ逃げてるだけね』
『私は、決して逃げない。相手の命を奪う事からも、自分の命を落とす事からも。
　決して逃げずに、恐れずに、これからも私は戦うわ‥‥この拳でね』

（私は‥‥逃げていたのか‥‥）

『引っ張り出してあげるわ‥‥５年前の貴方を。私が憧れた貴方を』
『貴方を、昔の貴方に戻してみせる。＜拳聖＞なんて名前を背負う‥‥弱くなる前の
　貴方に。そして、その貴方に、私は勝つ』

（強くなるはずだった私は‥‥弱くなっていたのか‥‥）

ハンの頬に、一筋の涙。

（この５年は‥‥何のためだったのだ‥‥一体‥‥）

＊

ハンがアリーナの蹴りに倒れてから、現実の世界において経過した時間は、ほんの１０秒ほど。

観客席最上段に座する審判から見て、その時間はまだ、ハンの敗北を告げるのに充分な時間では無いらしい。
いまだ、彼の負けを告げるアナウンスは、無い。

「何はともあれ、試合終了のアナウンスを待つばかりですな」
「‥‥ブライ殿」
エンドール王が、おずおずと声をかける。
「もし‥‥ハンが再び立ったら？」
「‥‥彼奴とて人間、あの蹴りを食ろうては立てませぬ。ですが、もし再び彼奴が立ち上がるような事があれば‥‥その時は」

そこでブライは、間を置いて‥‥そして、言った。
「彼奴は人間ではない、ということでしょうな」

＊

王女（アリーナ）の幻影が、言う。

『もう、いくつとも知らない命を、私はこの拳で奪ってきた‥‥この拳は、本当に多くの血を吸っているの。‥‥そうやって私は、ここまで来たのよ』

（貴方は、悔やまぬのか‥‥他の者の命を奪う事を‥‥！）

ハンの心の叫び。
自分のいまだ立てない領域に、彼女は、拳を血にまみれさせ、既に立っていたのだ。

『もちろん、他者の命を奪う事、それ自体は決していい事だとは思わない。でも、それを避けて、全力を出さずに負けるよりは、全力で戦いたい、そして勝ちたい。絶対に』

（全力を出さずに負けるよりは、全力で戦い‥‥勝つ‥‥）

それは、先ほど、組み合わせ抽選会の時、壇上でアリーナが語った言葉。
その言葉が、今再び、ハンの心に深く染みわたる。
（そうだ‥‥そうだな‥‥）

アリーナの幻影の背後に、うっすらと光明が見える。
かすかな観客の声援が、少しずつ、そのボリュームを増してゆく。

ハンの心の奥底に眠る、原初の衝動。
５年間抑え続けたその衝動が、今再び、あかあかと燃え上がろうとしていた！

（私は‥‥勝ちたい‥‥！）

＊

「大丈夫っ！？」
アリーナが思わず、ハンの許に駆け寄る。

今まで、憧れていた昔の荒ぶるハンと戦うために、彼女は試合を進めていたのだ。
彼女にしてみれば、ここでハンに勝ってしまっては、元も子もない。

ゆえに、相手を蹴り倒した後、その身を心配して思わず駆け寄る、という、ある意味矛盾した行動を、アリーナは取ってしまったのだが‥‥

その時！

ブオオッ！
横たわったハンの体から、突然、何かが湧き上がった！
それは、まるで突風のような、黒い闘気の嵐！

「！？」
アリーナが、思わず歩みを止める。

＊

（勝ちたい‥‥そう心から望んだからこそ、私はあの時も、全力で戦い、全力で技を
出したのだ‥‥あの挑戦者の強さに応えるために）

ハンの意識の中で、アリーナの幻影が言う。
『もう、貴方にも分かってるはずよ。＜拳聖＞のままでは私に勝てないって』

（そうだ、分かっている‥‥。私は貴方に勝ちたい‥‥だから‥‥）

『いい加減、意地を張らないで、本当の力を出して。私の願いをかなえて』

（そうだ‥‥そうだとも‥‥）

光が大きくなる。
声援もまた。

（私の中には、本当の力が眠っている‥‥。５年前に捨てたはずの、人殺しの力が‥‥）

ハンの涙は、止まった。
もはやここに、あの＜拳聖＞はいない。

（貴方に勝てるのなら、私は‥‥）

光が、闇を振り払う。
地を揺らす声援が、彼の体を揺さぶる。

（私は‥‥！）

そして、
ハンは戻ってきた！

＊

「何っ！？」
その闘気に、思わず驚きの声をあげるアリーナ！

「あれは！」
「なんと‥‥」
クリフトもブライも、驚きを隠せない。

彼らの前で、＜拳聖＞が‥‥いや、先ほどまで＜拳聖＞であったものが、ゆっくりと起き上がる。

どす黒い闘気を身にまとい。
両腕をだらりと下げ。
目をらんらんと輝かせ。
唇の端には歪んだ笑みを浮かべ。

ハンは、戻ってきた。
いや‥‥

「立つか‥‥あれを食ろうて、なお立つというのか‥‥」
ブライが呟く。

「あれは‥‥あれは一体‥‥」
エンドール王が、信じられない物を見た、という顔で、ようやく一言、言葉を絞り出す
モニカに至っては、何も言えず、ただ怯えた顔で、戦闘台を見ているだけだ。

「ハン‥‥ですな。＜拳聖＞ではない、＜拳聖＞になる前の。しかし‥‥」
ブライの額に、冷や汗が一筋。
「あれを食ろうて、なお立つ。しかもあの闘気‥‥」
しばらくの沈黙の後、ブライが吐き捨てるように口にしたのは、たった一言。
「‥‥化物め」

＊

「何です‥‥あれは‥‥」
観客席で、ラゴスもまた、震えを隠せなかった。
「あれが、あの＜拳聖＞‥‥あれが、ハンだというのですか‥‥」

「あの闘気‥‥まるで別人だわ」

ビビアンも。

「化物、いや、それ以上だ」
サイモンも。

「強そうなんだな。あいつと戦ってみたいんだな」
ベロリンマンも。

それぞれの想いを抱え、ハンの再びの目覚めを見ていた。

＊

吹き上がる、黒い闘気。

圧倒的な存在感で立つハンを前に、ただひとり、震えぬ人物がいた。
本当に嬉しそうな顔をして、ハンの前に立つ少女。
今まさに、己の夢がかなうのを目の当たりにした少女。
アリーナである。

「やっと‥‥戻ってくれたのね！」
喜びに目を潤ませ、アリーナが言う。
「５年前の貴方に‥‥！」

しかし‥‥

「いや、違うな」

口の端に笑みを浮かべたまま、ハンは言い放った。

「！？」
アリーナの顔が、一瞬こわばる。

瞳から、野生の獣のような光を放ち、ハンが言う。
「私は、５年前の私に戻ったのではない」
「そんな‥‥！」
アリーナの悲鳴に近い言葉を遮るように、ハンは続けた。

「確かに、私は、５年前に封印した技を再び思い出した‥‥姫君(プリンセス)、ずっと私を見て
いた、とおっしゃるならば、私がかつて何と呼ばれていたか、ご存じであろう」

「えっ‥‥？」
意表をつくハンの質問に、しかしアリーナは、一言ずつ噛み締めるように、答えた。
「ええ、知っているわ‥‥」
真剣な面持ちで、その名を告げる。
「＜闘神＞」

＊

「闘いの‥‥神‥‥」
「そうです。それがハンのかつての通り名」
「確かに、その名には聞き覚えがあります」
モニカに答えたブライの説明に、クリフトが口を挟む。
「姫様が、昔何度か口にしていらしたような‥‥」

「じゃろうな。恐らくはお主にも」
目を伏せる。
「闘いの神とは、その司るものが闘いである以上、強く、そして時に残虐である
ものじゃ‥‥決して常に『聖なるもの』ではありえぬ」

こくっ。
聖なる神に仕えるクリフトにも、それは分かっているのだろう。無言で頷(うなず)く。

「だからこそ、彼奴は、５年前、相手を殺めざるを得なかった‥‥そしてその時、
彼奴は＜闘神＞でいることを止めたのですじゃ」
「それが＜拳聖＞か」
「御意」
王の言葉に相づちを打ちつつ、ブライは続ける。
「人を殺さぬ者‥‥『聖なるもの』に彼奴はなった。そして５年‥‥姫様という強敵に
めぐり合い、彼奴は再び＜闘神＞となった‥‥はずじゃが‥‥？」

＊

「そうか、知っているか」

唇の端をさらに歪め、ハンは笑った。
「ならば当然、これも知っていような」
そう言い終わると、彼は、右足をすっと前に出した。
右拳を、前へ。
そして、左腕を、その右の前腕の上に重ねるように、また前へ。

「さっきと、構えが違う！」
「出るぞ。＜闘神＞の技」

　そんなクリフトとブライのやり取りを、聞いたのか否か。
　再びにやりと笑うと、ハンは、両の拳を、一気に、ばっと開いた！

「！」
「あの構えは‥‥！」

観客席から、そんな声が聞こえる。
観客の中にも何人か、知っていた者がいたようだ。
そして、当然、アリーナもまた‥‥

「＜蓮華（れんげ）の構え＞‥‥」
「そうだ。さすがだな」

「やはり、間違いない。５年前までのハンの構えじゃ」
「ブライ殿！」
王の鋭い声が飛ぶ。
「なぜハンは構えを変えた？　あの構えには、どんな意味があるのだ！」
「‥‥あの構えは、彼奴のかつて最も得意とした技を出すための布石‥‥」
「かつて最も得意とした‥‥技‥‥？」

「そして、この＜蓮華＞を知っているということは、次に何が来るか、それも知っていような」
「ええ」
短く答えると、アリーナもまた、構えを取った！

両手を顔の前に。
右足を前に出し、わずかな前傾姿勢。
こちらは、先ほどと同じ構えである。

と、その瞬間である！

「おああっ！」
気合一閃、ハンが動いた！
間合いを詰め、開いた右掌を、拳を握らずにそのまま、アリーナの顔面めがけ突き出す！
だが！

「‥‥遅い！？」

先ほどの「無限拳」のスピードに比べて、拍子抜けするほど、あまりに遅い攻撃！
「これなら‥‥」
アリーナがそれを右によける！

しかし！

突然、掌の方向が変わった！
よけたアリーナの左頬を、掌が直撃する！

バチイィン！

「あぐっ！？」

「！」
「姫様！」
この試合初めての、ハンの攻撃のクリーンヒットに、モニカが、クリフトが、悲鳴にも似た叫びを上げる！

「ブライ殿、これは！」
「これが、かつてのハンの技‥‥」
ブライが、額から冷や汗を流しながら、王に答える。
「掌打です」

「これが‥‥これが＜闘神＞の掌打‥‥」
アリーナが驚く間もなく、ハンが次の攻撃をたたみかけて来る！
ビュオッ！
「くっ‥‥！」
ハンの左掌をしゃがみ(ダッキング)でかわす‥‥しかし、掌が、再び方向を変え、しゃがんだアリーナを押しつぶすかのごとく、そのこめかみを叩く！
バシッ！
「ぐうっ！」

「かわせない‥‥？」
クリフトが、声を上げる。
「あれだけ遅い攻撃なのに‥‥」
「それが曲者なのじゃよ」
ブライの答えは、簡潔だった。
「遅いからこそ、曲げられる。遅いからこそ、彼奴は姫様の反応を見て、よけた先を
　攻撃できるのじゃ。それに‥‥」

ドムッ！
今度はアリーナの肋(あばら)の下に、ハンの掌がめり込む！
「がはっ！」
アリーナの呼吸が、一瞬止まる！
表情に苦悶が浮かぶ！

それでも、その衝撃を利用し、後転して間合いを離すアリーナ。
立ち上がり、構えを取り直す。
「はあっ‥‥はあっ‥‥」
苦しそうな表情。
息が上がっている。

「アリーナ姫様‥‥すごく苦しそう‥‥」
泣き出しそうなモニカ。
胸の前で手を組む。

「あの掌打というのは、実に厄介ですじゃ。物理的な破壊力は小さいが、柔らかい
　人間の身体には、想像以上に強烈なダメージを与える事ができますれば」
「想像以上に強烈な‥‥ダメージ‥‥」
「左様‥‥モニカ姫様、今の姫様のダメージは、恐らく相当なものかと」
「そんな‥‥」

拳の先‥‥「点」で目的物に攻撃を当てる拳打と違い、掌打は、掌‥‥すなわち「面」で、目的物に衝撃を伝える。

ブライの言う通り、確かに、物理的破壊力では拳打に数段劣る掌打。
しかし、その目的物が、人間の身体のような、水分を含んだ柔らかいものであるならば、目的物に密着し、かつ広範囲で接する掌打の方が、無駄なく衝撃を伝える事ができるのである。

「どうした、姫君（プリンセス）」
黒いオーラをまとった、荒ぶる＜闘神＞が、勝ち誇ったように言う。
「私に勝つのではなかったのか」

「‥‥」
アリーナは、息を弾ませたまま、無言。

「もはや、口もきけぬか」
言い放つハンに、今度はアリーナは‥‥
小声ではあるが確かに、こう言った。

「これよ」

「？」
「これが、私の望んでいた戦いよ」

そう言って、彼女は、口の端に笑みを浮かべたのだ。
相手と同じ、戦う神の笑みを！

「アリーナ姫様！」
「おお！」
喜ぶモニカとエンドール王！

「ありがとう、ミスター・ハン」
己の敵を見据え、不屈の王女殿下（ハイネス）は言う。
「ここからは‥‥」
そして、構えをとった拳を再びぎゅっと握り直すと、叫んだ！
「全開よッ！」
それと同時に、間合いを詰めると、電光のような右正拳！

（ふん‥‥！）
それを余裕でよけたハンが、カウンターの右の掌打でアリーナの顔面を狙う！
（！）
アリーナもよけ返す‥‥
それを追い、掌打が曲がる！
しかし‥‥！

（なにっ！？）

アリーナの動きが、先ほどと違う！

彼女は、体を傾けてさらに頭を振り、その曲がった掌打をもかわしたのだ！
その勢いで、地面に手をつき、体を横に倒しながら、足を振り上げる！
下から垂直に襲いかかる、変則の上段回し蹴り！

（掌打をかわし切り‥‥反撃だと！？）

ハンはその足を腕で払い、アリーナの頭を押さえるように、掌打を放つ！
迫る掌を、アリーナは腕で受け流し、起き上がると、バックステップで間合いを‥‥

離さない！
一瞬下がると見せかけて、再び前方へ！
「おおおっ！」

アリーナの放った左正拳が、ハンの顔面に迫る！

ビシュオッ！
拳が空を切る音が、戦闘台(リングダ)に響く！

アリーナの拳は、当たらなかった。
ハンがかわしたのではない。アリーナの狙いが逸れたのだ。
なぜなら‥‥

「！」
「どうした、モニカ？」
「アリーナ姫様の‥‥左の頬が‥‥！」

観客席がどよめく。

アリーナの左頬が切れ、そこから血が一筋流れている！
驚愕するアリーナの表情！
そして、その頭の斜め後ろには、ハンの拳！

「何じゃと！」
ブライが叫んだ！

ハンの拳が‥‥掌ではなく拳が、アリーナの頬をかすめていたのだ！
それをかわさねばならなかったため、アリーナの狙いが逸れたのである！

「くっ‥‥！」
アリーナが、今度は大きく退く！

再び、遠い間合い。

「拳打‥‥じゃと‥‥？」
ブライが、かすれた声で言う。

５年前のハンは、掌打で戦っていた。
すなわち、これほど高速の拳を、打てるわけがなかったのだ。

「あそこから拳打とはね‥‥さすがにビックリしたわ」
アリーナの額に浮かんだ汗は、冷や汗なのか。

「言ったはずだ。私は５年前の私に戻ったわけではないと」
また、あの歪んだ笑みを浮かべるハン。
「＜闘神＞の掌打に加え、＜拳聖＞の最速の拳打‥‥」
そして、ゆっくりと、噛み締めるように言う。
「私は、新たな私となったのだ」

ハンの言う通りである。
彼が、この５年間で身につけた、「無限拳」をはじめとした＜拳聖＞の技‥‥
今のハンには、５年前までの＜闘神＞の技に加え、それが加わっているのだ。

今この時、アリーナの前に立っているこのハンは、５年前の＜闘神＞ではない。
＜闘神＞を超え、そして＜拳聖＞をも超えた、最強の格闘家なのだ！

「ブライ様‥‥」
クリフトも、不安げな表情である。

「なるほどね」
アリーナの唇に、再び笑み。
「やっと意味が分かったわ。貴方が５年前の貴方じゃない、って言った意味が」
そう言って、左の頬の傷を、親指でぬぐうアリーナ。
ぴっ、と、血が一滴、戦闘台（リングに飛ぶ。

「でも、だからこそ、だからこそ貴方と戦いたい。そして‥‥」
再び、構えを取る！

「勝つのは私よ」

＊

「何という‥‥何という意思の強さだ‥‥」
驚嘆したのか、呆れたのか、ラゴスが呟く。

「あれだけの攻撃を見せられても、闘志が全く衰えぬのか」
眩しい光を見るような目つきの、エンドール王。

「儂も、正直、よもやあれほどとは思いませなんだ」
ブライの言葉は嘘ではない。
この旅の間でのアリーナの成長は、教育係であるブライの想像をも超えていたのである。

「この分では、精神面で負ける心配は要りませんな」

＊

「さすがだ」
短く、ハン。
「だが、その強さが、死を招くかも知れぬのだぞ」
かつて、実際に対戦相手を、その強さ故に死に追い込んだ者の、その言葉である。
このプレッシャー！

「言ったでしょ」
しかし、表情を変えずに、構えのまま、アリーナは答える。
「私は、死ぬ事も殺す事も恐れないって」
「良くぞ言った」
にやり、と、また、例の笑いを浮かべるハン。
「ならば、行くが良い。あの若者が待つ場所‥‥」

構えを、再び取る。
再び開かれた、ふたつの神の掌！

「涅槃（ニルヴァーナ）へ」

＊

「『涅槃（ニルヴァーナ）』？」
耳慣れぬ言葉に、聞き返すモニカ。

「一切の苦しみのない、安らぎに満ちた場所‥‥のことです。宗教用語ですよ」
クリフトが解説する。
しかし、その顔は、言葉の内容に似つかわしくない、厳しいものだ。
「しかし‥‥そんな場所は、この地上のどこにもありません」

「えっ？」
「モニカ姫様‥‥」
同じような表情で、ブライが言う。
「涅槃（ニルヴァーナ）とは、生の苦しみから解放された者の行く場所、すなわち、あの世の別名です」
「あの世‥‥？」
「つまり、彼奴は‥‥」
苦々しげな顔で、ブライは言う。

「姫様に『死ね』と言っておるのです」

＊

「ウオオオオオ！」
雄叫びとともに、ハンが攻撃を開始した！

変幻自在の掌打が、最速の拳打が、アリーナに襲いかかる！
それをかわし、突きを、蹴りを、肘を、ハンに放つアリーナ！

両者一歩も退かぬ、凄まじい攻防！
沸き立つ観客席！

（今、私は戦ってるんだ‥‥あのミスター・ハンと‥‥）
（この充実感‥‥５年間忘れていた、これが格闘の充実感だ‥‥）

夢がかなったアリーナと、己の力を取り戻したハン。
ふたりは、理解していた。

今、自分たちが、格闘家として、もっとも幸せな瞬間を迎えている事を‥‥！

だが、その瞬間にも、終わりが近づいていた！

＊

ビュオッ！
ハンの掌打が、アリーナの顔の真っ正面に迫る！

「くっ！」
顔の前で、両腕をクロスさせて防御するアリーナだが‥‥

掌が、顔面に当たらず、眼前で静止した！
「えっ？」

「フェイント！？」
「いや‥‥」
クリフトの声に答えるブライ。
「目隠しじゃ。彼奴め、掌で姫様の視界を塞ぎおった！」

そして、その掌がアリーナの眼前から消えた時‥‥
彼女の視界から、ハンの姿そのものが消えていた！
「‥‥ハンは！？」

「いかん！ ハンを見失っておる！」
ブライが叫ぶ！

アリーナが見失ったハンがどこにいるか、もちろん貴賓席のブライたちには、完全に見えていた。
ハンの居場所、それは‥‥！

「下っ！？」

アリーナが気がついた時、ハンは、アリーナの眼前にしゃがみ込んでいたのだ！
ハンの右掌が、上を向き‥‥アリーナの顎を狙う！

（あの若者を殺した技‥‥この＜涅槃掌（ねはんしょう）＞で‥‥）
ハンの瞳が、ぎらりと光る！

（飛んで行け！）
掌を、アリーナの顎に向けて一直線に上げながら、ハン自身もまた伸び上がる！
ハンの腕が、背中が、足が！
全ての筋肉が、ハンの掌に力を集める！
凄まじいスピードで、掌が上昇する！

（涅槃（ニルヴァーナ）へっ！）

ハンが跳んだ！

ドゴオオオオッ！

ハンの掌が、アリーナの顎を撃ち抜く！
アリーナの体が、木の葉のように、宙に舞い上げられた！

「姫様！」
「姫様ァァァーッ！！」

（つづく）

＜次回予告＞

ついに、「闘神」へと戻ったハン！
彼の放った「涅槃掌」により、文字通り、アリーナは涅槃(ニルヴァーナ)への道を辿(たど)るのか？

否、我々は信じる！
我らが不屈の王女殿下(ハイネス)が、再び立ち上がることを！
そして、その手に勝利をつかむ、その時が来ることを！

「不屈の王女殿下(ハイネス)」第９話　「その名は＜王(ケーニッヒ)＞」

その右拳が光り輝く時‥‥「破壊の王」が顕れる！